・仮称

“きび”考

2011 年(平成 23 年)新春号(第 3 号)1 月発行

日本先史古代研究会

仮称“きび”考 2011(平成 23)年新春号(第 3 号) 目次

○仮称“きび”考 2011(平成 23)年新春号(第3号)目次 「設立宣言」 ・・・・・・・・・・・・・・・・2
○平成 23 年 年頭の挨拶 **若狭哲六** ・・・・・・・・・・・・・・・・3
○歴史の真実を追究する若狭先生 **劉 勝徳** ・・・・・・・・・・・・・・・・3
○ 倭(やまと) 迹迹(とと)日百襲姫(ひももそひめのみこと) 命 と五十狭芹彦(いさせりひこのみこと) 命 **池田博文** ・・・・・・・・・・・・・・・・・4
○古代土器製塩 一つの方法 **松浦宣秀** ・・・・・・・・・・・・・・・・・・5

○連載 考古フアンのじゃれごと ② **山崎泰二** ・・・・・・・・・・・・・・・・7
「吉備から見た弥生晩期から古墳時代の始まり」
○天津神社 立石考 **延原勝志** ・・・・・・・・・・・・・・・・・10

○岡山歴史研究会が発足 **山崎泰二** ・・・・・・・・・・・・・・・・・11

○備前・播磨地域の渡来人「秦氏」と神社について **井上秀男** ・・・・・・・・・・・・・・・・・12

○新連載 四国八十八ヶ所 巡り **樋口俊介** ・・・・・・・・・・・・・・・・・17
「歩き(ウオーク)遍路の旅」
○岡山「古代吉備の謎を探って」 **吉備槌太郎**(本松一郎)・・・・・20

○連載 神社の古代文字{絵文字}の考察 **丸谷憲二** ・・・・・・・・・・・・・・・・・24

○編集後記 **編集委員** ・・・・・・・・・・・・・30

日本先史古代研究会「設立宣言」

日本列島には、遠く西アジアや中国から、もたらされた「知られざる古代遺跡」が数多く存在している。考古学・歴史学・民俗学的分野を超えての「先史的見知」により、分析・調査・研究を駆使して、日本の歴史を正すことを目的に、賛同者有志一同で「日本先史古代研究会」を設立する。

2009(平成 21)年5月30日(設立総会にて)

平成 23 年　年頭の挨拶

　あけましておめでとうございます。

会員の皆様には佳きお歳をお迎えになられたことと存じあげます。心よりお祝詞申しあげます。

　さて、わたくしたちの研究会も発足されてから二年目を迎えようとしています。昨年は、会報として“きび”考も発行され、会員相互の歴史研究への機運も高まってまいりました。これは、ひとえに事務局の山崎泰二様をはじめスタッフの皆様の賜物と深く感謝いたしております。

　私達の住む岡山県（古代吉備の中心）には、先人の残した多くの文化遺産が残されております。目で見えるもの、見えないものが多くあります。先学の識者によって、それらが歴史・考古学的分野の中で、多くの成果をあげていることはいうまでもありません。

　私達の研究会は、郷土に埋もれている文化財のほりおこし、等々を顕彰するなかで、夫々が、地域活性化へのお役に立てればとの目的で発足されたのです。今後、更に会員相互の親睦の「和」を広げると共に会の目的達成への歩みを続けたいものです。

　おわりにあたり、会員各位のご健勝、ご多幸をお祈りし、新年のご挨拶とさせていただきます。

2011 年　元旦

日本先史古代研究会

会長　若狭哲六

歴史の真実を追究する若狭先生

日本先史古代研究会　会員　劉　勝徳
（岡山県華僑華人総会　会長）

　古里の謎に立ち向かい検証を進める・・・・・
尊敬する若狭哲六先生。先生をご紹介頂いたのは、在岡朝鮮の友人崔裕行先生・・・・。
老若狭偉人（ここでの老は尊敬する意味）は書道界のリーダーでもあり、2 年前からのお付き合いが始まる。北京清華大学李学勤教授は祖国では中国社会科学院、歴史研究所所長であり、国務院学位委員会歴史評議組長であり、夏・商・周・秦に於ける歴史科学家でもある。その、李学勤先生とのパイプ役を依頼されてからの交流である。

　ご高齢にもかかわらず、備前市と岡山市を、行き来を繰り返される熱血偉人である。神秘的な「熊山遺跡の出逢いと研究」を通してベールに覆われている部分に光を与える神秘に挑戦されている。その熱血する姿勢に深い敬意を表する。

倭迹迹日百襲姫命と五十狭芹彦命

日本先史古代研究会　会員　池田博文
（讃岐国一宮田村神社　宮司）

新年明けましておめでとうございます。謹んで新春のお悦びを申し上げます。

さて、私が御奉仕しています讃岐國一宮、田村神社は和銅二年（709 年）に社殿が創建されたとあり御祭神に第七代孝霊天皇の第二皇女であられる倭迹迹日百襲姫命をおまつりいたしております。この神様は岡山県高松町鎮座の吉備津神社、又同じく一宮町鎮座の吉備津彦神社におまつりしている五十狭芹彦命（大吉備津彦命）のおねえ様にあたられます。話は 1300 年も昔に遡りますが、当時の日本（倭の国）に大乱が起こり、世の中が乱れに乱れておりました。先の孝霊天皇は事を憂い手幼い兄弟を都（奈良）から遠く離れた、姉は讃岐へ弟は吉備の国へと、お逃がしになられました。その後乱が治まり姉は成人を迎えるとともに都に呼び戻され、今は大和國城上郡大市村にある箸の陵（みささぎ）といわれる箸墓に鎮まられ、弟はそのまま西海を鎮定し吉備國の祖神となられました。

お二人が瀬戸内海をはさんでお住みになられた讃岐と吉備の國は古（いにしえ）より年間の降水量が少なく、雨水に頼る日々でありましたが、お二人力を合わせて灌漑整備にいそしみ、農業殖産にあたられました。その一方で当時瀬戸内を中心に悪行をはたらき良民を苦しめていた海賊・山賊の族（やから）を退治し国の治安を計りました。この物語は昔話に出てくる、「もも太郎の鬼退治」として語り継がれております。このようにお二人の偉業を称え、それぞれのお宮におまつりするようになりました。今も昔も人々は力をあわせ事に当たり、世の中をまとめてゆかなければならないと言う教訓を現代の人々に教えており、はるか昔このような神様のおかげで今の岡山・香川が豊かであり、これからもお隣どうし二県が力を合わせてゆかなければなりません。

暗い話題ばかりの昨今ではありますが神々の力をいただき勇気をもって元気に生きてゆこうではありませんか。皆様の益々のご健勝を祈願し、奉賀のお悦びを申しあげます。

御祭神は倭迹迹日百襲姫命（通称＝卑弥呼女王？）（お墓は箸中古墳です）

岡山の吉備津彦神社に御祭りしている五十狭芹彦命（大吉備津彦命）の姉上様
皆様是非お参りしませんか　　編集者記

古代土器製塩　一つの方法

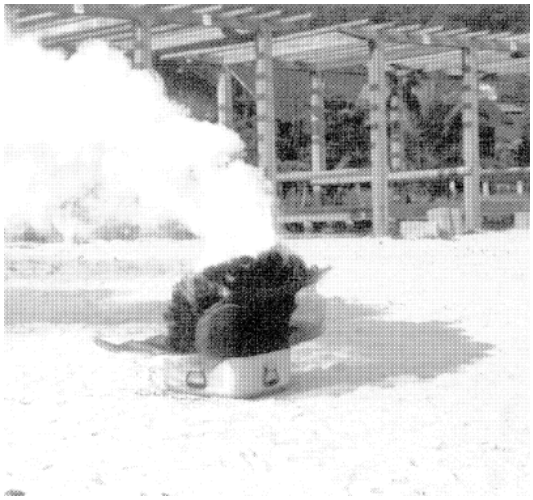
日本先史古代研究会　会員　松浦宣秀

蒲刈町は広島県呉市の最東端に位置し、対岸に豊田郡川尻町、東には豊島、西は朝鮮通信使の寄港地として知られる下蒲刈町に接し、大浦・宮盛・田戸・向の集落からなる大小 9 島で構成されている。

蒲刈町の歴史は古く、約 23.000 年前から江戸時代までの遺跡が数十箇所ある。1982 年に海浜で一片の土器を採取した。これは古墳時代前半代（約 1.500 年前）製塩土器の底であった。

1983 年に「県民の浜」として開発されることになり注目していたところ、製塩土器が出たので緊急発掘を行った。その結果、古墳時代から中世に至る製塩遺構が出土した。古代の土器による製塩法は謎であったので研究を始めた。古代に藻塩あったことは、万葉集や古今集等に 369 首ちかくあるが、製塩方法は歌われていない。古文書にもあまりはっきりしたものはない。ただ、万葉集に 2～3 首玉藻を利用したことが詠まれている。「・・・朝凪に玉藻かりつつ夕凪に藻塩焼きつつ・・・」塩づくりに玉藻（玉のついているホンダワラ系）を使ったとあることから、ホンダワラを利用して研究した。

研究を進める上に必要な実験の作業がある。最低次のような作業である。①藻の採取　②藻の乾燥保存　③土器製作　④土器の素焼き　⑤炉用石集め　⑥石敷炉づくり　⑦燃料集め　⑧濃縮　⑨藻焼き　⑩上澄み採り　⑪煮つめる　　大変な作業であるが 7 年間一人で行っていた。1989 年（平成元年）、藻の採取や煮つめるなどの作業を手伝う会を、関心のある人の呼びかけによって「藻塩の会」が結成された。作業をしてくれたので、楽に研究ができた。藻塩そのものは会結成後 2 回目の実験で完成した。要するに、カメにためた海水の水分を取れば濃度があがる。天日に干してすぐ乾くホンダワラを海水に浸して干すと早く水分が蒸発して塩分だけが藻に残る。これをカメの中の海水に浸して洗う。そしてまた乾かす。これを繰り返せば、水分が早くなくなってカメの中の海水は 3 日間で濃くなる。同時に藻の成分のグルタミン酸なども溶け込むので「うま味」がある。濃縮に利用した藻にも、濃い塩分が残るので、乾燥させて焼く（藻塩焼く）と炭と灰、ヨウドと塩の結晶ができる。この塩の結晶をとるために、先のカメにできた濃縮液に炭ごと全部入れ、かき混ぜて布越しする。布目を通ったものを一晩ねかせ、沈殿させた、上澄液を土器で煮詰めてつくった塩を藻塩という。藻の成分が溶け込んでいるのでうま味のある茶色（藻の色）の塩である。焼いた藻の炭をいれたために活性炭の働きをして、苦味を取り、まろやかな塩ができた。現在、古代の一つの方法として、この方法で塩がつくられていたのではないかと学会でいわれるようになってきている。最近、製塩遺跡から藻を焼いた灰が出土してきている。沖浦遺跡出土の製塩土器から藻につく珪藻の遺体や藻を焼いた灰などが見つかっている。



ホンダワラを焼く煙

土器の中にできた藻塩

万葉集の巻 7 の一節

「志賀の海人の・・・・藻塩焼く煙　風をいたみ　たちは上がらず　山になびく」はこの煙

その後「藻塩の会」は作業から得たものを生かし、修学旅行生をはじめ多くの人々に「古代塩づくり」の体験指導をするに至り、蒲刈町を大いにアピールすることになった。

その後この藻塩は、「海人の藻塩」として商品化され町の産業になった。今や有名ブランドとして全国にしられるようになっている。1983 年古代製塩遺跡発掘終了の時、発掘した遺跡を将来屋根で覆い見学できるようにしたいと念願し提案した。当初は夢物語と一笑されていたが、2000 年広島県知事にこの夢を話したところ、トントン拍子に話がまとまり、2003 年 5 月、念願の「蒲刈古代製塩遺跡復元展示館」がオープンした。遺跡発掘現場と出土土器を展示したものと、タッチパネル方式で遺跡や古代塩づくりなどを学ぶことのできるビデオ室を完備したものができ、展示館で古代の学習をして塩づくりの体験を行っている。どんな体験であっても、それの歴史文化などの学習をしてこそ初めて体験が活きてくるのである。

松浦さんとの出会いと顧問就任の経緯

当会会長　若狭哲六

松浦さんを当会の顧問にお願いした理由は、先生が 20 数年前よりご自分の住んでおられる島に、ペトログラフ的石刻文字の存在を確認しておられた頃に、広島市の「広島ホームテレビ」が、巨石文化についての取材に、私（若狭）が、その頃、加茂川町にシュメール文字が石に刻まれていることで、小著を出していた頃と重なり、広島ホームテレビより案内があり、私が広島の宮島での取材されていた頃、同島で知り合った方です。

松浦氏は、後でわかったのですが、その頃すでに、呉市の蒲刈の砂浜に、古代の塩作りの遺跡を発見されていたのです。久しぶりに先生と連絡をとったところ、先生は現在「内閣府　地球活性化伝道師・広島県文化財協会理事・広島県立歴史博物館友の会理事」をなさっておられる故、私としましては、当研究会に顧問としてお願いしました次第です。松浦さまとは知り合いになってから 22 年になります。

“考古フアンのじゃれごと” ②

吉備から見た弥生時代晩期から古墳時代の始まり

日本先史古代研究会　会員　山崎泰二

現在の我々は弥生人（人種）の延長に存在

中国の江南地方で発生した水耕稲作が、朝鮮半島や直接海流に乗って日本列島に渡来したことは学者の皆さんの研究で定説化し、弥生土器から弥生時代と呼称する。それ以前に１万 2000 年もこの列島で生活していた縄文人は（縄文時代と称する）、主に山野で小動物を狩猟し果実を採取しまた海や川から魚や貝を採り、移動しながら生活をしていた。そこに「水耕稲作」の新技術を持ち込んだ我々の祖先が、土地を占有し定住しながら急速に日本列島を寡占した。今から 2500 年昔の出来事である。押し出された縄文人は列島の片隅に追いやられ駆逐されたと信じられていた。しかし最近のDNA技術の発達で縄文系の混在が確認されつつある。私は「戦闘好きな弥生人が未発達の縄文人を駆逐した」のではなく、「戦闘行為を伴わないで同化」したと信じたい。

その根拠は、もともと縄文人は焼畑耕作で稲作をしていた事実である。縄文貝塚から出る多量の穀物の内「稲」の痕跡が多いと、高橋護教授は長年の研究の結果から述べておられます。残念かな稲=米は「連作」が出来なく、やむを得ず焼畑を 2･3 年で放棄し、移動しながらの栽培になり収穫量も限定されていた。人口密度も弥生時代に比べると極端に低いとの推計もなされている。しかし縄文人はお米の「味」を知っていた。他の果実や穀物に比べ美味しく貯蔵が出来持ち運びも簡単である。そこに連作の可能な新技術を持って登場した弥生人の水耕稲作を垣間見て、感服･敬服したと想定する。いったん耕地にすると何度でも使え、新しい耕作地は次の生産に拡大発展する。苦労して焼畑を開墾しても 2･3 年で放棄しなければならない縄文陸稲は、新しい移住民である弥生人にはかなわない。戦う前に降参である。もともと耕作地の場所が違っていたこともあって、縄文人と弥生人の交錯は少なかったと思います。

弥生人の水耕稲作の日本列島における進展は、中国や朝鮮半島に比べて加速度的と思えます。約紀元前 500 年前に九州島北部に上陸した弥生人は、稲＝米の連作障害を「水耕稲作」をすれば、同じ場所で毎年耕作が可能な技術を持ち込み、日本列島の「瑞穂の国」にて新技術が大きく開花しました。それから弥生時代の終末期（西暦 200 年代）には、稲作の中心地は北部九州から我らの吉備一帯に移ります。すでに今の畿内から東海に水耕稲作は伝播し、北陸の南部まで拡がっていたと想定できます。これが通説になっているようです。しかも当時今日と近い方法での「田植え」が吉備で行われていたのです。百間川遺跡で自然の偶然が重なり綺麗な稲株の跡が出現しました。稲は程よく成長しているところに、小さい砂粒が30㎝も覆って来る洪水になり全滅してしまいました。「小さい砂粒」は稲株に付着し、付近には逃げまとう弥生人の足跡まで残しているのです。平成 22 年 11 月 20 日の山陽新聞に大きく報道されました。

百間川遺跡の水田跡　2010.11.21 の現説

稲株の跡と弥生人の足跡 2010.11.21 の現説
中央右の長楕円が弥生人の足跡

稲株は専門家の説明で「田植え」をしていると断定しています。約 2000 年前吉備の先人は「田植えをする技術を開発」していたのです。稲の品種はジャポニカで基本的には今と変わりはありません。平らな所ではそこそこの

広さの田圃です。高低差のある場所では小さい田圃の区画で、畝や畦で水の管理がしやすいように工夫されています。大きな水路から水を引き、田んぼの中を水が移動しながら次の田に注ぎます。農閑期には家族のために適地を選んで開墾です。西の大川（旭川）には堤防がありません。大水が出るとまた一からやり直しです。しかし上流の腐葉土は稲作には大切な栄養分でした。天候に恵まれると豊作が労苦を吹き飛ばします。活力の再生です。弥生人は稲作の富で他の集団と「部族抗争」をして勢力を拡大して行ったとの通説がありますが、吉備における弥生の終末期には、「環壕集落」の痕跡は見当たりません。抗争の必要がなかったのです。

大首長墓＝楯築遺跡は何を意味するか

RSKバラ園の近くは新幹線の開通以来、科学的な発掘調査が行われ往時の姿を専門の先生方から伺うことが出来るようになりました。足守川の海岸線がバラ園のすぐ隣にあり、大掛かりな港湾施設があったそうです。私は吉備海人の本拠地と思います。ここから瀬戸の穴海を経由して北九州・朝鮮半島・出雲方面にまた南九州から直接中国の江南地方まで交流し、今の畿内から東海に豊富な稲作の「富」を背景に交易したと思います。先人の黒住秀雄先生は吉備の中山がその中心と教えてくださいました。その通りの場所に弥生終末期の港湾施設が存在していたのです。中国の江南から得た知識は「道教」です。楯築遺跡での祭祀は日本列島在来の祭祀だけでは説明できません。薬師寺慎一先生は、集落で行われていた当時の祭祀が、首長のお墓で行うようになったとし、その場所は楯築墳丘墓だと断定なさっています。もしこの楯築の丘で「呪術的な祭祀」が行われていたとすると、それは吉備海人が中国の最新の知識である道教（呪術）を持ち帰り「吉備の首長」に伝授したからではないでしょうか。私は吉備の海人が活躍した証拠がそこにあるように思います。

近藤義郎先生は楯築墳丘墓を正確に発掘し　①弥生末期日本列島最大の墓　②32kgの水銀朱は高品質で中国のもの　③埋葬者は女性のようだとされ、薬師寺慎一先生は、水銀朱は祭祀に使ったと考察なさっています。すると魏志倭人伝に出てくる卑弥呼が祭祀に使った「鏡」と「朱」が直ぐに想起されます。時代もほぼ同じ時代です。私は勝手に、楯築の丘（当時日本列島一番）で卑弥呼（当時列島のTop）が今まで集落で行っていた耕作祭祀を大掛かりに魏志倭人伝に出てくる祭祀を行ったと信じています。皆さんはいかが想いですか。稲作の富と吉備の海人が先進の中国の情報を持ち帰り、「卑弥呼」が新しい祭祀の方法で人民をまとめた実態が明らかです。九州島北部に上陸した外来の人々によってもたらされた水耕稲作は瞬くまに日本列島を席捲し、最新技術集団はこの吉備地方に移ります。自然発生的な信仰が首長と呼ばれる卑弥呼のような統率者が儀式として神聖な場所で特異な祭祀を背景にしたその発祥の地が、楯築遺跡なのです。吉備地方で儀式に用いられた「特殊器台」は北部九州・出雲・ヤマトへ進展しその後、古墳時代には「円筒埴輪」として長く受け継がれます。また楯築墳丘墓の中心が丸く両サイドに方墳が出た特異な形は片方の方墳を取り除くと前方後円墳となりヤマト発進の前方後円墳の原型＝母体になりました。港湾施設のあったすぐ近くの丘が楯築祭祀の場所です。

吉備祭祀（文化）の東進が古墳時代の始まり

従来大和政権が吉備地方の祭祀を取り入れて前方後円墳と円筒埴輪を定型化したと説明されていますが、私は「吉備の勢力の東進に伴いその技術や祭祀の仕方をヤマトや吉備と同じく他地方から集まった勢力の合意で吉備の主導の基に古墳祭祀が標準化した」と考えています。吉備勢力がヤマト在来の民衆を制圧したのではなく「吉備の進んだ祭祀」を在来者が認めた文化の伝播は高い所から流れ落ちる原理と同じなのです。

既にヤマトには出雲や越（こし）の勢力が琵琶湖を経由して入って来ました。しかし彼らの持つ四隅突出墳に代表される祭祀（文化）より吉備の祭祀（文化）が定着したのは、それだけ支持者が多かったことを意味します。背景に水耕稲作の高等技術（例えば田植えによる稲作・水の管理）と吉備の海人による航海力であります。朝鮮半島の南部に（同じ風俗を持ち多分に言葉も通じた同族）通じていた吉備の集団の持つ新進の文化は、他の日本列島の有力勢力集団を圧倒していたのです。記紀の編者もその辺は認めなくてはなりません。ヤマト草創期に吉備の祭祀（文化）が大きく影響したのは、応神期前後の記述に身近な存在として描かれています。大変友好な関係であったのです。天皇＝大王の妃や采女が地理的に離れた吉備に多く排出し、大和に近い国々からはほとんど出ていません。初期のヤマト草創期は正に吉備の祭祀＝文化の東進そのものでした。

箸墓古墳は吉備祭祀そのものだ

箸墓古墳の正面（宮内庁管理）（22.9.12）撮影

箸墓古墳の遠景（前方後円墳）（22.9.12）撮影

まず通説を説明しますと、奈良県の南部桜井市の箸中（箸中古墳とも称する）に存在し全長 278m高さ 30mの前方後円墳で 3 世期中ごろの築造とされ宮内庁は被葬者を 倭 迹迹日百襲姫　命（やまと と と ひ も も そひめのみこと） として管理していますが、築造年代から魏志倭人伝に登場する倭の女王「卑弥呼」との説が有力です。この古墳は纏向地区に存在する最大の規模を誇る古墳時代初期＝弥生晩期に登場する前方後円墳として定着しています。

そこで私の考えを述べます。岡山には箸墓の 1/2 の浦間茶臼山古墳と 1/3 の網浜茶臼山古墳が同じ時期に築造され通説では箸墓の設計図で築造されたとなっていますが、築造時期は微妙なものです。弥生終末期列島最大の楯築墳丘墓の築造集団が操山から吉備の穴海が眺望できる網浜に築造し、その後東の大川（吉井川）西の浦間に 1/2 の前方後円墳（古来、形がお茶を作るときに用いた臼に似ているので茶臼山と通称していた）を作った。既に出雲勢力が青銅の文化（技術）を持ち込んでヤマト南部（纏向地区）に進出していたが、われらの吉備集団は①楯築から受け継いだ首長の埋葬施設に祭祀の文化と②墳墓の形を前方後円墳にして後円に被葬者を埋葬し前方部で祭祀を行い③吉備の特殊器台で祭壇を作り、当時最有力者＝首長霊を呪術（道教的）祭祀の形で、多くの民衆の支持を得て統治する一定の形が出来上がり、箸墓古墳＝前方後円墳の基本形となったと理解しています。出雲の進んだ金属加工の技術も当時のヤマト集団は重要でした。しかし基本的には農耕にて生活をする弥生の延長に居ますと、心の支え＝信仰が必要です。縄文人から弥生人に受け継がれた精霊崇拝＝信仰から祖霊信仰に移りますが、集団をまとめる何かが必要でした。吉備族が開発した祭祀の文化は、仏教の入ってくる直前の古墳前期の民衆は、吉備集団の進んだ「祭祀」に敬服し、金属加工の新技術は朝鮮半島と密接な関係を持つ出雲族に習い、祭（政）ごとは吉備方式を採用したのです。合理的な考えで今日まで続く我らの祖先に敬服です。吉備族は武力でヤマトを征服したのではありません。弥生末期列島の頂点に立つ「水耕稲作技術」を背景に吉備海人の冒険的好奇心で中華や古代朝鮮から文物を持ち帰り、列島独自の新しい文化がヤマトの地で花開こうとしているのです。　　2010.22.11.30

天津（あまつ）神社　立石考

日本先史古代研究会　会員　延原勝志

天津神社が浦伊部より現在の地（備前市伊部 629）に移ったのが西暦 1579 年（戦国の世）と伝えられる。天津神社参道を上がり本殿手前の随身門の西約 15mの所に、昔より南に傾いた立石がある。注連縄（しめなわ）を巻いた高さ 1m50cmほどの石は、注連縄がきいたのか、子供の頃の私もこの石には登ろうとはしなかった。近年巨石を見たり探したりする内に妙な事に気付いた。それはこの天津神社立石（これより東石と記す）の傾きに似たような角度・割れ目・傷・重なり等を持つ石＝巨石が多い事だ。例のごとく磁石等を持ち、この東石を測ってみた。高さ約 150cm・傾斜角度約 76 度である。また今年前半に東石の正午の影の長さを測ってみた。冬至 12 月 22 日＝183cm（約 6 尺）、大寒 1 月 20 日＝165cm、立春 2 月 4 日＝139cm（約 4 尺 5 寸）、雨水 2 月 19 日＝113 cm、春分 3 月 21 日（+1 日 3/22 日）＝62cm（約 2 尺）、穀雨 4 月 20 日（-1 日 4/19 日）＝24cm（8 寸）などである。しかし夏場に近づくに連れて、東石の上を木の葉が覆うため計測がほぼできないが、立夏の 5 月 5 日で影が北側に出来なくなると思われる。また、夏至 6 月 21 日には影が朧（おぼろげ）ながら南側に 24cm程の長さになっているように見えた。（**東石の長さで季節が判る**）。そして時刻も東石の頂点と、南の山の谷を結んだ線上に太陽が来ると正午であることも判った。（**東石と山の谷で正午が判る**）

そして東石より西約 8m の所に、もう一つ高さ約 180cmの立石がある。（これより中央石と記す）　中央石の頂点と東石の頂点を結ぶと、東の山の稜線のやや上が見える。中央石と東石は東西の関係にあり春分・秋分の、日の出はこの点より日（太陽）が昇る。しかし実際は山の稜線になるので季節はもう少し先にずれて、穀雨の時期ぐらいになる。（この地方の種蒔きの頃か？）陰暦だった昔、農業等で太陽観測をする必要が生じ、神官が影の長さから季節を読み「そろそろ種蒔きの時期である」とか「台風の季節に入る頃である。」など村人に伝え、又、日の短い季節には、正午の時刻を太鼓等で人々に知らせたのかもしれない。つまり安土桃山時代、南蛮貿易などで磁石（羅針盤）が日本に持ち込まれ、いち早く東西を示す石組を置いたのであろう。

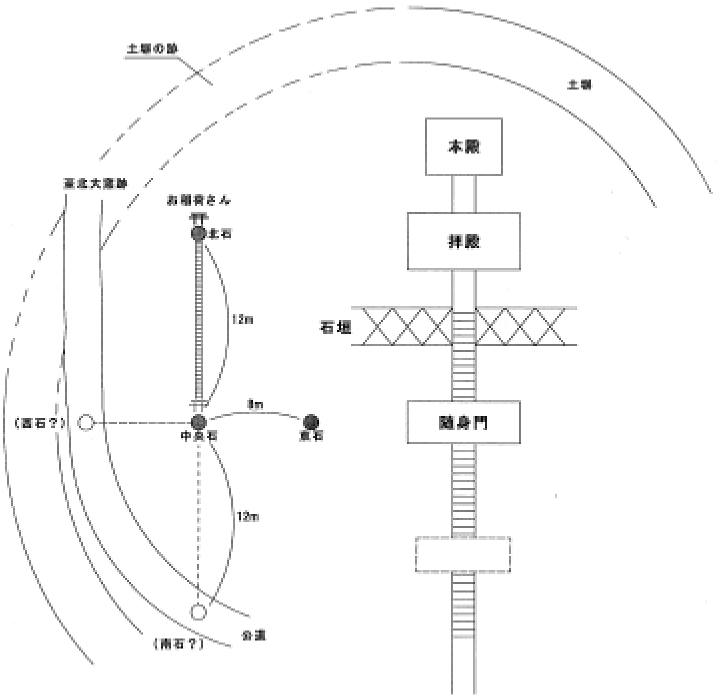
東石と中央石の関係はそのような役割であると想像できるが、中央石の真北に、もう一つ立石があることに最近気が付いた。この 3 個の石を見ると、楯築遺跡を思い出す。時代は異なるが 3 世紀中頃の日本最大の祭祀の丘である。（薬師寺慎一先生著「楯築遺跡と卑弥呼の鬼道」参照）安土桃山時代にも伊部（忌部）天津神社の地で鬼道（道教）の祭りが行われていたのではないか？と想像する。今では北大窯へ上がる道があるので「南石」「西石」は無いが、天津神社の境内と推定できる土塀の内に「五つの石」は修まる。地元の古老に聞いても、南石・西石があったことはわからなかった。

余談になるが、日幡宮司の話では、天津神社本殿の下より「天太玉命」と刻印された鏡が一面出土している。その鏡は今本殿に神鏡として大切に祀られている。（古事記天孫降臨の段に忌部氏は天太玉命を祖とする記述がある）又、忌部氏は古代宮中の祭祀を執り行った一族でもある。皆様も是非一度、伊部天津神社参拝に訪れて頂きます様ご案内申し上げます。以上で天津神社立石の私説と致します。　**平成 22 年 12 月吉日　工房にて**

伊部の天津神社正面　備前焼の参道がすばらしい

中央石

北石



天津神社　立石　概会配置図　（延原作図）

★★

岡山歴史研究会が発足

考えてみると不思議なぐらいなことに、岡山県には歴史全般を対象にする任意団体が存在していなかったのですが、全国歴史研究会が平成 23 年度の大きな行事として岡山大会を 3 日間開催される企画に促されて、平成 22 年 10 月 14 日に「岡山歴史研究会」が発足しました。我々の日本先史古代研究会の若狭会長など多くの歴史系団体のキーマンの方に呼び掛け人=推薦人になって頂き、当日は約 130 名の方が会場の岡山後楽園の鶴鳴館に満席の盛況で現在 200 名を超える会員を抱える、県下最大規模の歴史系任意団体が発足しました。

我々の日本先史古代研究会から若狭会長・野崎豊氏が顧問に就任して頂き、不肖山崎と本松さんが副会長そして井上・樋口・稲見・片山さんが運営委員として参加することになりました。県下には歴史系の団体は其の外にも多く存在します。各団体の自主性を尊重しつつ、お互いに切磋琢磨しながら協力し、全国に我らの岡山=吉備国を発信する原動力になればと念じています。この会は原則個人参加であります。新しく会員になりたい方は下記までご連絡ください。入会は随時受け付けています。　山崎泰二

連絡先　岡山歴史研究会　会長＝天野勝昭　事務局長＝山本敦
所在地＝〒701-1332　岡山市北区平山 844-86　山本方
電話・fax＝086-287-6226　携帯＝090-4576-6955　e-mail:yamamoto.atusi.@white.plala.or.jp

備前・播磨地域の渡来人「秦氏」と神社について

日本先史古代研究会　会員　井上秀男

一、兵庫加東郡来住城と浦伊部の来住家の私考

仮称“きび”考の第２号に備前市浦伊部の来住法悦（きしゅ・ほうえつ）に関する文面を投稿しました。その中で来住氏については岡山県立博物館・研究報告②の中から来住法悦関係文書を参考文献として書きました。来住家の先祖については、由緒書によると、同家の祖は讃岐国高松の牢人で善悦の子＝法悦のとき浦伊部に移住し、従来の長尾姓を改めて、来住氏を称したと記されている。又**「来住権右衛門　口上　覚」**の文面に**法悦（来住）より私迄七代ニ成申候　己上、右法悦儀　讃州牢人ニ而御座候　由　名字来住ト伝申候　己上**　と来住権右衛門平忠景の口上覚が来住家文書に見える、それと来住家蔵「系図」による略系でしか祖先を調べる資料は、今のところ見当たらなかった。もう一つの文献として播磨後風土記第七巻、古城の部の条に、来住城があり播磨国加古郡（今は加東郡）来住郷来住村に来住城が載っている。**「城主多田満仲之末裔来住比処依之名来住安芸守景政子源三郎景利皆武勇也天正年中楯籠（たてこもり）三木城郭戦死今有子孫里諺景利三男備前忌部住秀吉出張于時供而行病有之止又右景利三人一秀長為仕官一石州浜田行以武幹頓才為仕官一忌部太閤丸屋敷止宿為鍬業」**　と記されている。

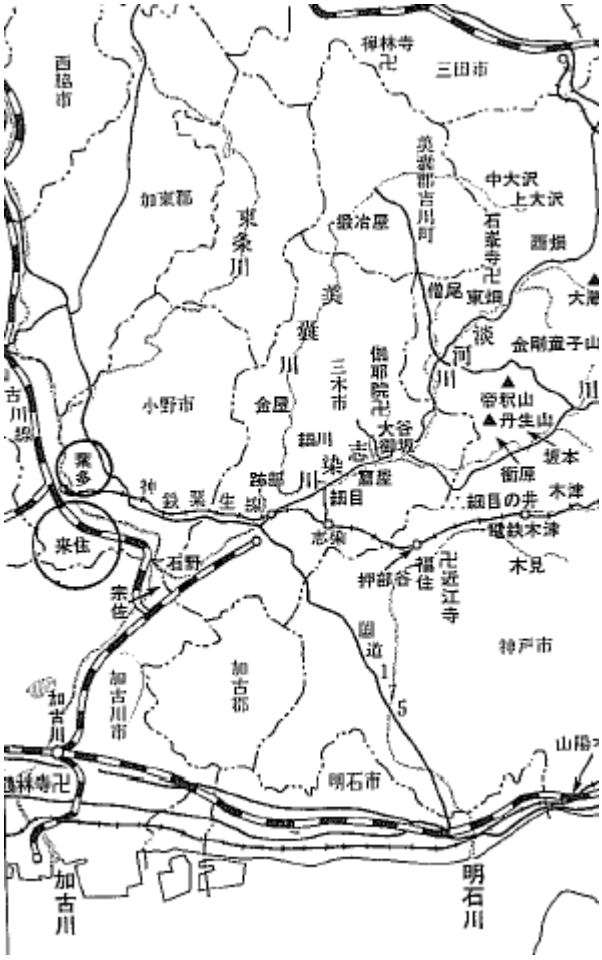
赤松氏とその研究（一）藤本哲著、168頁に同文の文面で来住城について書いてある。しかしこの来住城主、来住安芸守景政は多田満仲の末裔となっている。備前市浦伊部の来住家の菩提寺の妙圀寺は永長年間（1096～1099）多田満仲5代孫、多田明国の創建と伝えられている。どちらも多田満仲に文献上で関係があるようにおもわれるのですが詳しく調査してみるべきであろう。来住城の文面の中に備前忌部住とか忌部太閤丸屋敷、という箇所から見ると浦伊部の来住家と関係が深いように考えるのですが、これも良く調査してみる必要があると思う。

それともう一点疑問に思うのは、来住家系図を見ていて来住宗重郎平輝景（法悦）その子供来住弥三兵衛平豊景と代々名乗の前に平の字が入っているのに気付く、これは系図の角度から見た場合に平氏の関係の流れをあらわしている。源氏の流れは源の字を用いている。来住城主の来住氏は多田満仲の末裔となっている平のところが源であれば、摂津多田の源氏の末裔であると理解ができるのである。私考するに来住氏は播磨の赤松氏に関係の平氏の流れを汲むのであろうと思うが定かでない。又来住氏の代々の名前に景の字を通し字として使用している。法悦は輝景、子供は豊景と、来住城の来住安芸守景政、子供が景利と**景**の字を通し字としている。何か浦伊部の来住家と共通したものを感じるのである。来住城の説明文の中に**天正年中楯籠三木城郭戦死・・・・・**の天正年中とあるが、豊臣秀吉が天正６年（1578）に播磨三木城主の別所長治を攻めた三木城合戦の時に別所氏側にいて楯籠って戦死したのであろう。三木城は最終的には、天正８年正月頃に落城する。三木城落城の２年後に備中高松の役があり、天正 10 年（1582）6 月 2 日に京都本能寺の変があって、秀吉は急いで京都へ馬を走らせ、浦伊部の来住家に立ち寄ることが出来なかった。（前号を参照）

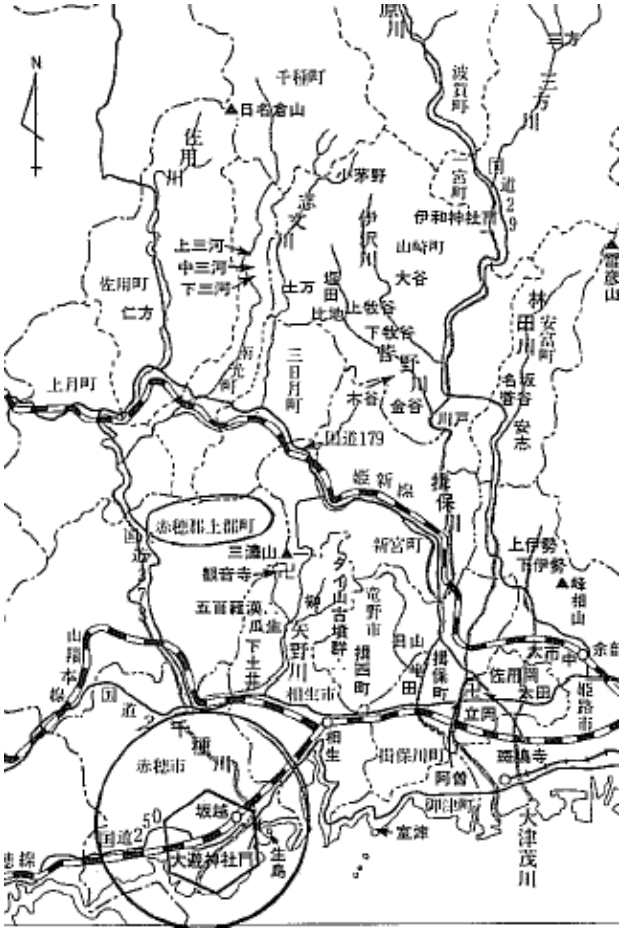
二、兵庫加東郡来住郷来住村の地名と神社　（兵庫県加東郡来住界隈の地図参照）

今から15年前に古本屋から入手していた「兵庫の中の古代朝鮮」という本を読んでいたら渡来人ゆかりの神社と地名の条に「来住」＝きし　という珍しい地名があるとして、地名の由来に関しての文面が目に止まり、その内容は、前項の来住城のある加東郡来住郷来住村の地名についてで、このあたりは古名を伎須美野（きすみの）といっていたのであるが、伎須美がなまって「きし」となったようである。「播磨鑑」の加古郡の条に由来が記され来住村にはスサノオノミコトを祭った牛頭天王（ごずてんおう）社があって、この神社は建久年間（1190～1199）に国中に疫病がが流行して人民が多くしんでいくので室山の常光寺にいた泰順という僧侶が疫病をとりのぞく為に建久 3 年（1192）に京都の祇園社（八坂神社）の分霊スサノオノミコトを迎えて祭ってから疫病が鎮まり、この時に牛頭天王のおつげがあって「私が紀氏野（きしの）に祭られるようになってから疫病の心配はないであろう。又・山の下の温泉が出たのも私が来住（来て住む）した証拠である」といわれ、この時から紀氏野を改めて来住村と名付けた、来住には大荒（おおざけ）社があって秦河勝を祭っている。

以上の由来譚によるとこのあたりは紀氏野と呼ばれたところであったが牛頭天王社を祭るようになってから来住と書くようになった。「牛頭天王（スサノオノミコト）は新羅から渡来した神様で渡来人達が祖神として崇拝した神であることを思えば、この来住村に渡来人が定住していたと推測される」と来住（きし）の地名について書いてあった。来住の近くに葉多という地名があり昔は小野町畑と言っていたとのこと。秦氏は新羅からの渡来人で、日本書紀によると、応神天皇の時代（5世紀初頭）弓月君（ゆづきのきみ）が百二十県の人夫を連れて渡来し、淀川（山城川）・桂川（京都）あたり山城国葛野郡に定住し、河川を改修し農業や養蚕を営んでいたというのが秦氏の祖といわれている。



兵庫県加東郡来住界隈



赤穂市坂越界隈の地図参照

三、秦河勝を祭った兵庫の神社（赤穂市坂越界隈の地図参照）

秦河勝は飛鳥時代に聖徳太子の最高の臣下として、当時の朝廷の財務担当の大蔵大臣として活躍した豪族である。その秦河勝を氏神として祭った神社として大避（おおさけ）神社が兵庫県内に鎮座している。赤穂市坂越（さこし）の「大避大明神」大避神社である。神明帳には「元名大辟」と書く「オオサケ神」を「大荒大明神」と書く。又大酒神社と酒の字をあてる神社があるが酒の神ではない。坂越の大避神社と同じ性格で境の意の「辟」が「酒」になったのであり境界神としての神社名を持つ塞の神、道祖神的な意味をもっていると考えられる。

山城国の大酒神社は山城秦氏の本拠地太秦（うずまさ）にあるが、播磨国の大避神社（赤穂市坂越）のある赤穂郡周辺にも秦氏がいた。延暦 12 年（793）4 月 19 日付の播磨国坂越・神戸両郷解（げ）には天平勝宝 5 年（753）頃、この地に秦大炬（おおこ）なる人物がいたとあり「三代実録」の貞観 6 年（864）8 月 17 日条には播磨国赤穂郡大領外正七位下秦造内麿が外従五位下になったとある。赤穂郡の大領が秦造であったということが「続日本紀」にあり、大領は郡の長官でもとの国造クラスの、その地方でもっとも有力な豪族が郡の大領に任ぜられるのが律令制の慣例である。赤穂郡ではその大領が秦造です。「平安遺文」の史料では 11 世紀後半の東寺文書の中に赤穂郡の大領秦為辰（はたためとき）が土地の開発領主として開墾していることの史料が残っている。

また、長和 4 年（1015）11 月の国符に記された赤穂郡有年（うね）荘の文書に寄人 41 人の連名があり、その中

で秦姓を名乗る者が 12 人もいたことが記されている。この様に赤穂郡には秦河勝を氏神として祭った大避神社が建てられ古くから秦氏の勢力が広がっていた地域と思われる。

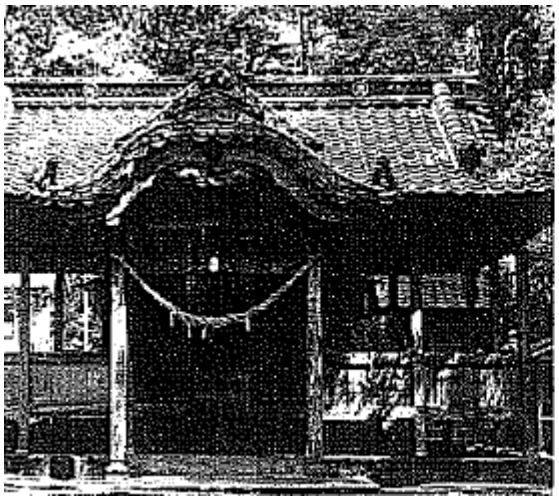
秦河勝上陸を伝える坂越生島

(播磨名所巡覧より)
播州坂越大避大明神の図

四、赤穂郡坂越以外の地で祭られている大避(おおさけ)神社

赤穂郡上郡町大枝新という集落の中に千種川に沿った場所に大酒神社が鎮座している。以前赤松氏の歴史を訪ねるため、赤松地区に足を運んだ。赤松氏の菩提寺の法雲寺の境内にある赤松円心・則祐・満祐等の五輪等を写真に納めたりした。上郡町の中心から国道 373 号線を千種川に沿って北上すると左側に広い沖積地が広がっている平坦な土地の中に森が見える。その場所が大酒神社である。境内には昔から何年も経った巨木が何本も生えていて歴史を感じる神社である。

旧赤松村の岩木に大避神社がある。(写真参照) 旧赤松村の岩木は「慶長播磨絵図」に載る岩木鍛冶屋村を含む旧岩木村である。岩木には良質の銅鉱山の峯尾山があり、この地の大避神社は鍛冶(鍛冶屋村は鍛冶村ともいわれているが、むかしは鍛冶千軒ともいわれていたという)鋳物・採鉱にかかわる人たちが祀っていたのであろう。



岩木大避神社

竹万大避神社

五、備前香登(かかと)の大酒殿跡と秦氏

秦氏は播磨西部から備前・美作にかけて広く分布している。8 世紀頃、備前国人で香登臣(かかとのおみ)の姓を賜った秦大兄、邑久郡積梨郷に住んでいた秦造国足と秦部国人等の秦氏が見られる。備前香登本の大酒殿址は秦大兄の先祖を祀っていたと伝えられている。大酒というと播磨の秦河勝を祀っている神社に大避神社がある。備前の周辺にも播磨の秦氏系氏族が住んでいたのだろう。美作国には、秦豊永が三保村大字錦織(に

しきおり）の村社の錦織神社に祭られている。久米郡の土地名で秦氏に関係した地名も数多くある。

六、和気清麻呂と秦氏

和気清麻呂は天平勝宝 4 年（752）頃、奈良の東大寺大仏開眼供養が行われた、この頃、都に出て武官として朝廷に仕えた。清麻呂 20 歳頃である。また清麻呂の姉の広虫が采女として奈良の都にいた。天平宝字 6 年（762）6 月に孝謙上皇（女帝）が出家し広虫もこれにしたがって尼となり法均（ほうきん）と号して上皇の腹心となる。そういった身近に中央とのパイプ役としての姉の広虫がいた関係で朝廷内での出世もでき、清麻呂自身の人格もあり都での活躍が出来たであろう。清麻呂は弓削の道鏡事件・長岡へ都を移す長岡遷都・平安遷都など国家の大事業に関与して来た。その国家の寺院・土木・建築などをする人物、職業人として活躍するのが、渡来人の秦氏や他の渡来系の氏族の支援と技術力・経済力を得ていると考えられる。和気清麻呂は当時の渡来人との深いつながりを持っていたと思われる。

寺院の建立・土木河川工事など技術集団と親密な関係を持って中央の朝廷で活躍した和気清麻呂である。故郷の吉備地方の備前・美作の郡司達に寺院の建立等の促進をうながし、和気清麻呂の子供＝和気広世と五男真綱（まつな）は平安山岳仏教の発展の為に力を尽くした。最澄・空海の外護者となり平安仏教の創立に貢献している。和気清麻呂は宝亀元年（770）頃、祭祀官として備前美作の国造（くにのみやっこ）に任命されている。熊山にある熊山遺跡の築造には、和気氏と渡来人の土木技術集団の秦氏の協力があったと思われる。熊山遺跡の解明には、色々な角度から調査研究をして、熊山遺跡の解明がされる時がくる様に願っている。

和気清麻呂像と和気神社

参考文献　兵庫の中の古代朝鮮　段熙麟著
大日本地名辞典　吉田東伍著
和気郡史
和気清麻呂　平野邦雄著
秦氏の研究　大和岩雄著
赤松氏の史料研究（一）　藤本　哲著
ふるさと上郡のあゆみ
（赤松氏総集編）　上郡町編

四国八十八ヶ所めぐり「歩き（ウォーキング）遍路の旅」

日本先史古代研究会　会員　樋口俊介

はじめに

なぜ、歩き遍路をはじめたのか？幼少の頃、母からお大師様についていろんな話を聞かせて貰っていたせいもあるが、私は良く分からないけどお寺やお宮に行くことが大好きでした。手を合わせると、なぜか心が落ち着き、どんなに落ち込んでいてもパワーをもらえ、帰るときには元気になれました。いつかは四国八十八ヶ所を歩いて見たいとの願望は常に持っていた。定年退職して、今日までの人生を、振り返り反省を含めて家族、両親、兄弟、友人、知人等に感謝し、少しでも恩返しが出来ればとの思いと、此れからの人生を少しでも前進し充実した生活と社会に貢献できる様に努力することを基本にしたい。

人はなぜ、四国遍路に誘われるのでしょうか。人間関係に疲れた人、仕事上の悩みを抱えている方、亡くなった近親者の供養のため、心の傷を癒し苦しみからの救いを求めての巡拝もあれば、自分自身の内面を見つめ、此れからの指針を得るための旅もあるでしょう。お大師様と同じ道を歩き、同じ景色を見ることで、何かを感じ取りたい。生きていくなかでぶつかる困難にも、逃げずに向かっていける強い心を身に付けたい、人のために少しでも役に立つ精神を磨きたい。では修行に行ってきます。

なお、私はバスでの巡拝は（1番「霊山寺」～88番「大窪寺」）結願後に1番札所にお礼参り、その後、弘法大師ゆかりの高野山の奥の院に参詣で満願となる。これを3周し現在 4 週目は「歩き遍路」にて巡拝中です。

<u>初めに意外と知らない　参拝の手順について　（初心者の方は是非参考にしてください）</u>

札所での一般的な参拝の手順である。人によって微妙に作法は異なるが、弘法大師が開いた真言宗の作法を基本としている。境内では、本堂、大師堂、その他の順に参拝しよう。

① 山門で一礼する
- 山門の左側から仏様と弘法大師に一礼。
- 仁王門の場合は左右の仁王様に一礼して境内に入る。

② 手水場で手と口を清める
手順 1＝手水で身を清める。
手順 2＝左手、右手の順に清めてから。
手順 3＝左手の水で口をすすぐ。

③鐘楼で鐘をつく
- 参拝後に鐘をつくのは「戻り鐘」といって縁起が悪いので、必ず参拝の前つくこと。
- 早朝や夜にはつかないこと。

④ 輪袈裟と念珠で身支度を整える
- 輪袈裟を首にかけ、念珠をもつ。

⑤ 持参した札を納める
- 納め札や持参した写経を所定の箱に納める。

⑥ ロウソクと線香、銭をあげる
手順 1＝ロウソク1本を上段からあげ
手順 2＝線香3本を中央から立てる。
手順 3＝賽銭をあげる。（神社の場合は 3 回に分けて賽銭をする）

⑦ 読経し、合唱する
（ア）ご本尊や弘法大師を念じて合唱する。
（イ）読経の際は必ず経本を手にして（暗記していても）読経をする。

⑧ 墨書と朱印をしてもらう
（ア）納経所で所定の納経料を払う。
（イ）納経掛軸や判衣のある人は一緒に出す
（ウ）納経時間はどこの霊場でも、7～17時なので注意する事。
⑨ 本堂にむかって一礼し、山門を出る
札所や霊場には多くの参拝者が来るので、互いに挨拶を交わすように務めマナーを守って参拝すること。読経の際には、他の参拝者の邪魔にならない様に注意をする事。

発心の道場（阿波の国） その１

「1 番（霊山寺）～23番（薬王寺）」合計23ヶ寺（徳島県）

発心（ほっしん）とは、 四国霊場巡拝を志すこと。はるか彼方に向かって

1200Km あまりの辺路（へち）の旅へ、皆様をご案内いたします。

当日に歩くお寺に関する由来とか伝説等の内容を分かる範囲で説明をします。
これからが修行のスタートです。必ず最後まで歩き通します。

第 1 回目＝平成20年 4 月 12 日（土） 旅立ち 発心の道場へ！

歩き（ウォーキング）遍路　札所5ヵ所（1番札所～5 番札所） 歩行距離＝約11Km

1 番札所＝（竺和山） 霊山寺

所在地＝徳島県鳴門市大麻町坂東塚鼻 126

電話＝088-689-1111

※特に一番さんと親しみで呼ばれ、四国巡拝はこの札所からスタートする。

宗派＝高野山真言宗
開基＝行基
本尊＝釈迦如来

○天平年間（729～749年）に聖武天皇の勅命によって行が開基した古く由緒あるお寺と伝えられています。
○空海が天竺（インド）の霊山を日本（和国）に移すということから、天竺の「竺」＋和国の「和」で、この寺を「竺和山さん霊山寺」と名づけて、第1番の霊場としたそうです。
○重厚な仁王門をくぐると鯉の泳ぐ素晴らしい庭園があり、本堂には弘法大師の作と伝わる釈迦如来像が安置される。

釈迦如来について　仏教の開祖で、釈迦族の聖者という意味から釈迦牟尼とも呼ばれる。誕生してすぐに七歩をあるき天地を指したと伝えられています。

筆者紀行

岡山林原駐車場をバス2台（90人スタッフ等を含む）にて6：45分出発した、徳島県に入った頃から雨が降り出し一番札所（霊山寺）に9；20分頃に着いた雨は本降りになる。とにかく各自で歩き遍路が出来るように身支度を済ませ、まず一番札所（霊山寺）にて本堂、大師堂を遍路用の経本にしたがって順番で唱え、お参りしてから 9；50分に先達さんを先頭に二番札所（極楽寺）に、雨は段々はげしく降り出す誰もがこのさき不安な気持ちで歩いていた、その時に先達さんから弘法大師が産まれたときは雨が降っていたそうです。だから今日は大変に良い日でもあり、 諺に「雨降って地固まる」とあり2重に良い日でありますと、話を聞くとそれからの、みなさんは、元気が出たのでしょう歩くテンポが早くなりました。

2 番札所＝（日照山） 極楽寺　所在地＝徳島県鳴門市大麻町檜段の上 12

電話＝088-689-1112

宗派＝高野山真言宗
開基＝行基
本尊＝阿弥陀如来

○1番（霊山寺）と同じ町内、距離も1Km ほどの近さで、弘法大師が、2日間、無量寿の秘仏を修められ、最後の日に現れたという阿弥陀如来を刻み本尊にしたといわれているお寺です本尊横の安産大師は子宝と安産にご利あると言われています。

○ 境内の長命杉は弘法大師が自ら植えたと伝わり、樹齢1100年を超えると、伝えられています。

阿弥陀如来について　寿命無量、光明無限の仏。絶えることのない生命力と輝きをもつ。「南無阿弥陀仏」の念仏を唱える者をすべて極楽へ導く。

筆者紀行

1番から歩いて約1Km を20分で到着するも雨は相変わらず降り続く、階段をのぼると、樹齢1100年以上と言われる巨木「長命杉」がある。この杉は弘法大師が植えたもので、幹に触れると長寿になり、触った手で自分の悪いところをさすると、その部分が治るといわれているそうです、そこで私も幹を触ってみた。どうか長生きできます様に、と願いを含めてお参りする。

3 番札所＝（亀光山） 金泉寺　所在地＝徳島県鳴門市大麻町大寺亀山下 66

電話＝088-672-1087

宗派＝高野山真言宗
開基＝行基
本尊＝釈迦如来

○観音堂と太師堂の間に、「黄金の井戸」がある。昔、巡錫（じゅんしゃく）途中の弘法大師が水不足で苦しむ住民のために、この寺の境内を掘ったら霊水が湧出したと伝えられる。それ以来この寺を金泉寺と呼ぶそうです。

釈迦如来について　仏教の開祖で、釈迦族の聖者という意味から釈迦牟尼とも呼ばれる。誕生してすぐに七歩をあるき天地を指したと伝えられています。

筆者紀行

2番から歩いて約2．7Km を45分で到着するも、総勢90人が一列に並んで歩くので約100mになる直線、曲がり角等で前から見ても後ろからみても壮観です。雨はなお降り続く中で車道での歩きは大変でした。このお寺には「黄金井」という、弘法大師が掘ったといわれる井戸があり、のぞき込んで自分の姿がうつると長生き出きて、映らないと3年以内に死んでしまうと伝えられているそうです。恐る恐るのぞき込んでみると、きちんと映ったので一安心ホットしました。

4 番札所＝（黒巌山） 大日寺　所在地＝徳島県板野郡板野町黒谷居内 5

電話＝088-672-1225

宗派＝東寺真言宗
開基＝弘法大師
本尊＝大日如来

○弘法大師が自ら刻んだ大日如来像を本尊として祀り、これが寺号の大日寺の由来にもなっている。太師堂と本堂をつなぐ回廊には、江戸時代の西国三十三ヶ所の観音像が安置されているそうです。

大日如来について　真言密教の中心となる仏で、宇宙のすべての現象は大日如来の徳によるものいう。他の仏の徳も大日如来の一身に帰する。

筆者紀行

3番（金泉寺）のお参りがすんで板野で昼食をする。3番から歩いて約5Km を1時間25分で到着（途中で休憩10分くらい）雨の中での歩き、頭から足の先（靴の中まで水が入る）までずぶ濡れ、しかし何と無く心地よさが感じられる思い出で歩けるから不思議です。本堂と大師堂をつないでいる回廊には、33体の観音像が、ずらりと安置されていた。ゆっくりと見物が出来た。次の5番札所は下り坂なのでいくらかラクかな？

5 番札所＝（無尽山） 地蔵寺　所在地＝徳島県板野郡板野町羅漢林東 5

電話＝088-672-4111

宗派＝真言宗御室派
開基＝弘法大師
本尊＝勝軍地蔵菩薩

○嵯峨天皇の勅命で弘法大師が開基したと伝わり、本尊は甲冑（かっちゅう）を身に付けた地蔵菩薩だと言われています。源義経をはじめ武士たちの信仰を集めたという。奥の院には羅漢堂があり、五百羅漢が祀られているそうです。

地蔵菩薩について　弥勒菩薩が出現するまでの間、生前の因業によって、天上から地獄まで六つの世界に分けられる衆生を救済するという。

筆者紀行

4番から歩いて約2Km を30分で到着、途中にて後ろの若い女の子に「一人で歩き遍路するなんて、偉いね」と尋ねてみた「何か特に理由があるの？」。それに対して「弘法大師様に興味があって、弘法大師の歩んだ道のりを、自分で歩いてみたかったんです。」「それに父親の供養の気持ちもあったので」と、話を聴いて感心しました。 お参りが済んで本堂の裏側にある奥の院での「五百羅漢」を見て、その凄さと素晴らしさに感動です。

今日の歩き遍路の予定（約11Km）札所5ヶ所お参りは、初めから最後まで雨が降り続く中での歩きでしたが終わってみて清々しい気持ちが漂いました。ああ気持ちが良かった感謝！！16時30分に終りバスで岡山へ帰路に林原駐車場に19時20分頃に着く、あと我が家へ。

歩き遍路の筆者＝樋口俊介氏　平成 20 年 4 月 12 日スタート

岡山「古代吉備の謎を探って」

日本先史古代研究会　会員　　吉 備　槌 太 郎
（ 本松　一郎 ）

古代吉備国の歴史はほとんどが謎だが、私が最近謎解きに挑んでいる幾つかの事柄の中から御紹介します。

① 七十五頭家の謎を探る。 ② 古代吉備国の中心地を探る。 ③ 古代吉備国の範囲を探る。
④ 赤石の謎を探る。 ⑤ 久米と槌系の武術 ⑥ 吉備槌系と伝承

今回は以上の項目で古代吉備の謎解きに挑み少しでも早く古代吉備の謎が解明される一助になれば幸いと思っています。

1. 七十五頭家の謎を探る。

七十五が付く言葉で比較的有名なのが、全国各地で古代から寺社で実施されている七十五膳祭で新嘗祭の一種とされる。七十五膳祭で有名なのは吉備津神社で、藤井宮司さんにお聞きしたが、幾つかの説が在るが、数が多い意味と解釈をされ七十五膳祭は継続されている。全国には膳の数の違う祭りも存在し、例えば日光東照宮の二荒山神社の三品立七十五膳には位の低い神様の為に十六膳が脇に用意され、脇祭りとされるらしいから本来は七十五膳祭と推理される。私は「七十五」は、元々は吉備を治めた頭家の数であり、我家の土（槌）系調査をしているが、先祖と一族の神々は全国各地の寺社に多く祀られており、関係が在る筈であり、本来は「七十五頭家」が元と確信している。さらに、七十五頭家の内訳配分もほぼ判明したので御紹介する。

① 槌（土)系と物部系の三十三頭家、 ② 賀茂系と大国系の三十三頭家， ③ 残り九頭家の内訳は不明。

九頭家は、住吉系、素鵞系、葛城系か？ 現在九頭家は調査中です。

古代吉備の頭家の謎、頭家数の配分は美作の金刀比羅山を元とする本山寺御住職の道教思想の示唆でほぼ解けた。

槌系と物部系の三十三頭家は708年前の1302年（正安四年）志呂宮御祭頭文次第の資料を元に、美作宮座資料をまとめられた寺坂氏の資料からもほぼ判明しており、我家と同じ頭家筆頭の助貞家と、物部系に近い多くの一族は720年程前に古代の丹国(丹波国、丹後国、但馬国)辺りに移住した伝承がある。

2. 古代吉備国の中心地を探る。

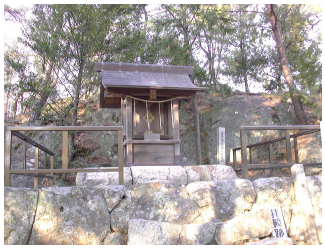
私の住む神乃邊は吉備でも古い土地柄で、神域でもあり、特殊性も多く謎であった。話は吉備の中心と関係が無いようであるが、陰陽五行説から見れば、槌（土)系の古代に於ける位置付けが判る。平成 21 年版の「むすび」（神社本庁と神宮司庁編集）の特集は、我家と一頭の属する「土」であった。この機会に土（槌）を再調査すると、陰陽五行説では「中央」である。 古代吉備の中心地は土(槌)の本拠地である神乃邊神目であろうと推理している。

〔１〕現在も残る神域の範囲

神乃邊の現在は半径が 2～3 キロメートル程であるが、古代吉備国では少なくとも三つの範囲に分けられる（現在の神乃邊を加えれば四つの範囲となる）。吉備全域が神域の可能性もある。

［2］神乃邊の範囲を探る

石上布都魂神社　拝殿



山上の旧社地の本宮

県内に該当する範囲も神域で神乃邊であった筈である。詳細は以下に述べるが、神乃邊は神部と同じと思われ、有名な奈良石上神宮の元宮でもある石上布都魂神社（写真は拝殿と山上の旧社地の本宮)は神部と記

述され、現神乃邊の東南(辰巳)に位置し、中心部から数キロの距離である。次に記述する安仁神社が一宮になる以前は当神社が一宮であったとの話もある。神乃邊の最中心部は半径十キロメートル程在ったと推理できる。神乃邊の最中心部周辺に関しての知識をお持ちの方は少ないと思われるので、先に比較的有名な神社等が登場する二つ目の領域を述べる。

① 二つ目の領域の範囲

吉備の中山は、備前国と備中国の国境があり、同じ山に今は両国の吉備津彦神社と吉備津神社の二つの一宮が中山を挟んで鎮座している。そのうちの吉備津神社は北を向き、古くから種々の憶測がなされたが、吉備中心部を向いたとの説は見えない。主な理由は吉備中山周辺や総社南部が吉備の中心地と思われている為である。私は、元々は津山の中山と岡山の中山は対で、神域の守神として設置されたと推理している。為に神乃邊神目より等距離で、津山中山神社は南を向き、岡山中山の吉備津神社は北を向き、共に中央を向く設計である。この説を補強する為に記述すれば、備前の元一宮の安仁神社も北西を向き、神域の最中心部南の山空(津山線の建部駅と金川駅の中間の箕地トンネル上部)方面を向き謎とされている。南東(辰巳)方向には日本のピラミッドと騒がれた熊山遺跡の東に在る熊山の烏帽子磐が該当する。 中心部より反対方向で北西(戌亥)の等距離には県内で有名な木山神社が在り、美作最南部の福渡に在る素盞嗚尊の烏帽子磐を結べば線上にも上山が在る。

② 神乃邊の最中心部を探る

紙面の関係で簡潔に述べれば、神乃邊の最中心部の北には分水嶺の筒の宮山(左には山王の森)があり、筒は槌や雷(いかづち)と同じで、言い換えれば、槌の宮山、雷の宮山とも言える。南には山空があり、南の麓には三社もの真名井神社が並び、さしずめ高天原かも知れない。 東には金勢様を祀る龍天山があり、西には南や南東から眺めると富士山のように美しい姿の本宮山があり、山の神峠の上に位置する御所からの眺めは格別である。北北西には吉備の二上山あり大和の二上山より柔らかな曲線の山である。

吉備の二上山

筒の宮山

吉備の本宮山

北西(戌亥は富徳で尊い方位)に役行者が吉備で大和の葛城山に模して、修研道の拠点づくりを図ったと思われる高蒼山が在り、中心部より反対の東南方向(辰巳は繁栄の方位)で距離は異なり、先に述べた石上地区が在る。 この北西と東南の線は古来から、重要な意味を持っている。 なお最中心部の南西方向の端は、県下最大級の祭りとも言われる加茂大祭の加茂総社宮が存在する。鴨系と大国主系の居住地は昔の旭川の流れに沿った西側(東は槌と物部系)で田地子の大穴周辺には現在も大国系の筆頭である大頭氏が居住される。

大国主神の本名は大穴牟遅命(おおなむじ)で居住伝承地は牧場の為に削られていたが、今は綺麗に緑化をされた筈である。なお、福渡の烏帽子磐の旭川西の対岸は建部(大和武尊の御名代)だが、真西に素盞嗚尊が住んだ伝承も残る高祖山(神力山)が存在しているが、江戸期に北向き「神の棚」が崩れて、多くの鉄剣等が出土したらしいが、保管された筈の出土品は蔵の中には何も残っていなかった。 しかし、古老の話から、山頂付近に歩くと響き「どんど」と呼ぶ所があり、大きな古墳が在ると推理される。

3. 古代吉備国の範囲を探る。

三つ目の範囲は吉備国の東西南北の国境(くにざかい)には守神が祀られていた筈である。(神域である神乃邊の中心部には東西南北の姓を持つ家が置かれていた。) 北の守神は出雲の神在月が終わる神送り時には、前半が出雲大社で行われ、後半は佐太神社で行われる。この神送り神事の場所が標高も地名も吉備の神目と同一の神目山の中腹で、窪地の池へ船を浮かべて行われると、朝山宮司さんから聞いている。さらに、「なめそ」(海蛇)伝説も同じだが、吉備神乃邊の伝承は「おおなめそ」で大人の太もも程度と伝わる。南は、四国山脈の剣山であるが、詳細調査は今後の課題である。 西は伊予大三島の大山祇神社も等距離に配置され、大三島の元宮は島の東側に存在し、東を向いていた。しかし、場所を西に遷し、向きも変え現在は伊予の一宮である。

地元の伝承を元に記すならば、現在の元宮がある北側の小高い丘の上に存在したとされる。私は昔の神社は高い山上で北東を向いていたと推理する。西が判明したからには東の賽の神が問題で、神戸市須磨公園より東の古社を探したが、条件の合う神社が発見出来ず困っていた時に、偶然にも赤石資料に兵庫歴史研究会の梅村前会長の記述された資料があり、早速お会いした時に概略の話から菟原住吉ではと教えられ、資料も頂戴した。 調べると古代に神戸市兵庫区の和田岬には日本書紀の巻第二十五に記述される「赤石の櫛渕」の沼名椋が存在し、「播磨、摂津両国の境」と記述される。梅村氏は赤石櫛淵を研究され、古代の櫛淵を明治二十四年の地図上に復元描写されて、「赤石の櫛淵は兵庫にあった」にまとめられている。

結論を言えば、赤石の櫛淵の東には塩土山が北東に長く横たわり、櫛淵の奥に「菟原住吉」が記載され、当然に対岸は吉備国から明石国へさらに播磨国になった地区の筈である。 菟原住吉が流失する前は西を向いたと推理する。 なお、菟原住吉の在ったと推理される辺りへ梅村氏に案内を頂いたが、私が推理した線と三キロ半程度しか違っていなかった。菟原住吉の流失や難波の港が砂で埋まり使用不能となり、摂津東端に難波の港や菟原住吉に該当する神社として住吉大社を建立したと推理する。松の化身とも伝わる住吉大社も吉備神乃邊、中心部の志呂神社神餞と同じ「ふと」「まがり」の神餞が存在し、神社の向きも西向きでした。

古代吉備の範囲を整理すれば、古代吉備の中心部から等距離に吉備を守る賽の神を設置し、東は、今は無い摂津の菟原住吉。北は出雲の佐太神社。西は伊予大三島の大山祇神社。西は四国山脈の剣山だが未調査である。

4. 赤石の謎を探る。

昔に我家の屋敷が在った松尾川の中州には赤い大きな磐座が存在し、十数年位前までは、赤石様と呼ぶ大きな磐座が存在したが、河川改修時に盗まれている。盗人どもに天罰、神罰を祈るばかりである。真西の荒神様御神体も同じ赤石がお祀りして在ります。当地は神域であり古代吉備の中心地の筈で、神乃邊の最中心部でもあり、不思議に思っていました。

赤石を調査した結果、全国に赤石は祀られている。私が確認した場所としては、兵庫県明石（赤石）、三重県熊野であるが、その他にも、北は東北の岩手県柴波（柴波は石の色で赤石神社も存在）から、南は高千穂の赤石神社まで各地に赤石神社が存在する。神社以外に石棺や石室にも赤石が使用され、さらに古墳の謎を解く鍵とも言われる楯築遺跡や吉備の中山頂上部の磐座からも水銀朱（朱は硫化水銀で高貴な色）が塗られた磐座が幾つか確認されている。　さらに秋田県の男鹿半島には赤神神社が存在し、越（こし）国の能登半島にも古くは吉備や出雲と同じ標高に神目地区があり、神目神社は場所を遷し現在も存在し、西の海沿いには赤神の地名も在る。これらは関連があると推理するが、奈良の茶臼山古墳の赤い石棺の公開時にベテランの博物館員の方に尋ねると、古墳との関連は否定されたが、熊本県宇土市の赤石が石棺に使用されたのは公知だが、当地には赤石神社が存在するから、とても無縁と思えない。なお赤石が明石になったが、大化改新以前は、明石郡、美嚢郡、加古郡、印南郡 の四郡が明石国とされる。

5. 久米と槌系の武術

古代の槌系には多くの武人が登場する。槌系と物部系は共に古代に軍事と祭祀を司どり、槌系一族及び七十五頭家と支族は多くの日本人に崇拝され現在も各地に祀られる。槌系と物部系の武人には火之迦具槌神、武甕槌神、武葉槌(倭文)神、武経津主神、大山祇大神、祇園様(素盞嗚尊)、猿田彦大神、饒速日尊、武御名方富尊、武克槌尊、武治速見命、武狭別命、等が居る。武士の時代となり武術の必要性増大から「槌系が古代から育くんだ武術」が、新らしい武術の流派として各地で花開いた。後の明治 38 年(1905)にも嘉納治五郎氏外 22 名中に、8 名の竹内流関係者が参加して、「日本武徳会柔道乱取制定委員会」が開催され「柔道」も誕生した。

竹内道場の愛宕神様

「ふと」＝女陰　「まがり」＝男根

槌系の武術は、「久米と猿田彦尊の武術」「槌と物部の武術」とも言われる。源平時代に敵味方を問わず両軍将兵に幾度となく賞賛された「平家侍大将平影清の武術」も槌系愛宕神化身を通じて清和源氏竹内家に伝授されたが、宗家も相伝家にも認識は無かった。愛宕神の化身が介在しており当然かも……。なお影清様は我家の分水嶺の山で、古代祭祀の無形文化財、男性と女性の性器を模した「ふと」「まがり」の神餞を捧げる神事発祥の場所と推理される影清山に祀られる。それも七十五頭家の物部系に近い清和源氏光延氏一頭に祀られている。村上源氏ならまだしも、何故に壇ノ浦後も庇護し、現在まで祀るのかは不明である。但し、新潟の大悲山景清寺の御住職から送付を頂いた資料には、源氏に生まれ、母方の平氏への養子(説)が記されていた。古代～近世武術の流れで、西日本で竹内流誕生の頃に、槌の東の拠点である常総の「香取神宮や鹿島神宮」は武道場と化し、長威斎は香取神宮の神威を感得して「天真正伝香取神道流」を応仁の乱(1399) の頃に開眼し、後の武術に影響を与えた。 具体的に「鹿島新当流」「鹿島神流」「鹿島神道流」「鹿島新陰流」等が誕生して、槌系武神の「布都御魂神」は武経津主神と武甕槌神らしく、霊力を受た神聖な剣技で剣霊に留まらず「雷神」で火の霊力を持つ「火乃神」「水軍の守護神」である。これは瀬戸内海の「山の神」「海の神」「酒の神」「武の神」種々の神で、吉備神乃邊の西の守神で御先祖の大三島「大山祇神社の大山祇大神」とも酷似する。なお剣聖の宮本武蔵は兵庫県生まれ説が有力で印南郡米田村説、揖東郡宮本説があり、岡山県大原育ちらしいが、没年から逆算し、天正十二年（1584）生まれらしい。父の無二斉と竹内流の道場訪問が竹内流年表に在り、支流大原畝流も在った。六十数度試合をして一度も負けず熊本県雲巖寺の霊巖洞で五輪書、独行道を書き終え六十二歳で往生したが、吉備の備前などでは「作州へ行って棒を振るな」と言われる程に「久米と猿田彦の武術」、「槌と物部の武術」以来の環境で育った成果であるかも知れない。

6. 吉備槌系と伝承

元々我家（元松家＝本松家）の先祖は、古代より明治までは通字(とうしじ)として代々男性は「槌」を、女性は「茅」を付けていました。男性は江戸の文政年間の生まれで明治末期に八十一歳で没した槌太郎で通字は終わりましたが、私のペンネームに頂戴しました。古くは日本書記の神代上の天地開闢には、国常立尊と国狭槌尊の御先祖様が登場し、有名人では愛宕神＝火之迦具槌神＝火産霊(ほむすび)。古事記に火之夜芸速男神、火之炫毘古神(ひのかがびこ神)、とある。八世紀の創作神話では火之神迦具槌神が生まれ伊邪那美尊が死ぬと伊邪那岐尊は嘆き悲しみ迦具槌神の首を十握剣で切り、血が岩にほとばしり「岩石の神」「火の神」「雷神」「雨の神」「水の神」多くの「山神」が生まれ、この時に八神が生まれ、死んでも山の八神が生まれている。

女性には「茅」が付けられ、有名人では、大山祇大神妃＝野槌神＝鹿屋(茅)野比売神、等が存在し、私の母親も古来からの茅を付けています。現在の岡山県吉備中央町（元は賀陽町と加茂川町）の賀陽は迦夜＝賀夜とも言われ、先の吉備津神社は「かや氏」建立と伝わるが、我家には「かや氏に関しては全く伝承は無い」しかし、「かや」には「女性の地」の意味があると伝わり、四～六世紀の朝鮮半島南部には、倭人が建国と韓国でも言われる「伽耶(国」は「任那、加羅」とも言われ、六世紀中頃に滅ぶが、吉備の迦夜も朝鮮半島の伽耶にも女王が居ても不思議ではないと思っている。

数年前に東京から「古代の槌(土)が現在に生き残ったと話題になっているよ」と知らされた。槌(土)系の元松(本松)家は日本最古の一族との説も在るが、七世紀末から八世紀初頭に日本の歴史が消されたとする説が多いが、我家と一族の歴史も殆んど不明である。槌系にとって「草の茅も木の栢も稲も神聖」であり、関連のある多くの寺社では、「御田植え祭り」や、「栢の木が植えられ」、夏祭り等には「茅の輪くぐり」が行われている。これは茅の輪を女性に見立てた子孫の繁栄と五穀豊穣を祈願する為の祭りと思われる。

追　補

土宮の簡易解説

伊勢神宮外宮は豊受大神を祀り、愛宕神の孫と言われ、外宮の真向かいに存在する。土宮3座として大歳神(初代大王の饒速日尊)、宇迦御魂(稲荷大明神、倉稲魂尊) 土御祖神(埴安媛尊)を祀る。全ての別宮が南面するが土宮のみ東面(冬至の日出方位)する。説明書は1. 宮名：土宮(つちのみや) 御祭神：大土乃御祖神(おおつちのみおやのかみ)2. 御鎮座地：豊受大神宮の大前御池真向い深い杉木立の中に土宮が鎮座される。

神社の古代文字「絵文字」の考察

日本先史古代研究会　会員　丸谷憲二

1　はじめに

川上神社(小田郡矢掛町小田有木谷)は、岡山県神社庁に登録されていない小さな神社である。矢掛町史にも記録されていない。この神社に絵文字が伝承されている。未だ解読されていない絵文字である。私は有木谷という地名に注目している。有鬼である。

「阿比留(アヒル)文字では無い」との野崎　豊先生の教示を受け、8 月 30 日に御案内いただいた。

川上神社の古代文字

「絵文字」

有木神社(本文は 26 ページ下段)

2　川上神社の絵文字

川上神社は、『矢掛町史本編・資料編・民俗編』にも記録されていない。川上神社の古代文字は「絵文字」である。「絵文字」は文字に先行する段階と説明される。つまり、「アルタミラ洞窟天井の指の跡」の次の段階の表記である。

絵文字とは「描かれた対象の意味を伝える単独の記号」である。川上神社の絵文字が神代文字であるならば、日本最古の神代文字の発見である。現在迄に公開されている神代文字と比較し、最古の絵文字であることを確認した。最古の神代文字「カタカムナ文字」の前の段階である。視力検査表(ランドルト環視力表:フランスの眼科医エドマンド・ランドルト(1846～1926)開発)のような絵文字である。

3　神代文字　説

「神代文字」で記録された太古文献(竹内文書・九鬼文書=春日文字・宮下文書=アソヤマ文字・東日流外三郡誌=津保化砂書文字　等)は現在の学説では偽書とされている。

最古とされる『東日流外三郡誌』の 9 種類の「絵文字」等と比較した。一番近い絵文字がカタカムナ文字である。

3.1　カタカムナ文字

カタカムナ文字と呼ばれる神代文字がある。川上神社の神代文字に「カタカムナ文字(化美津之文字・八鏡之字)」が類似している。しかし、一致する文字は一字も無い。

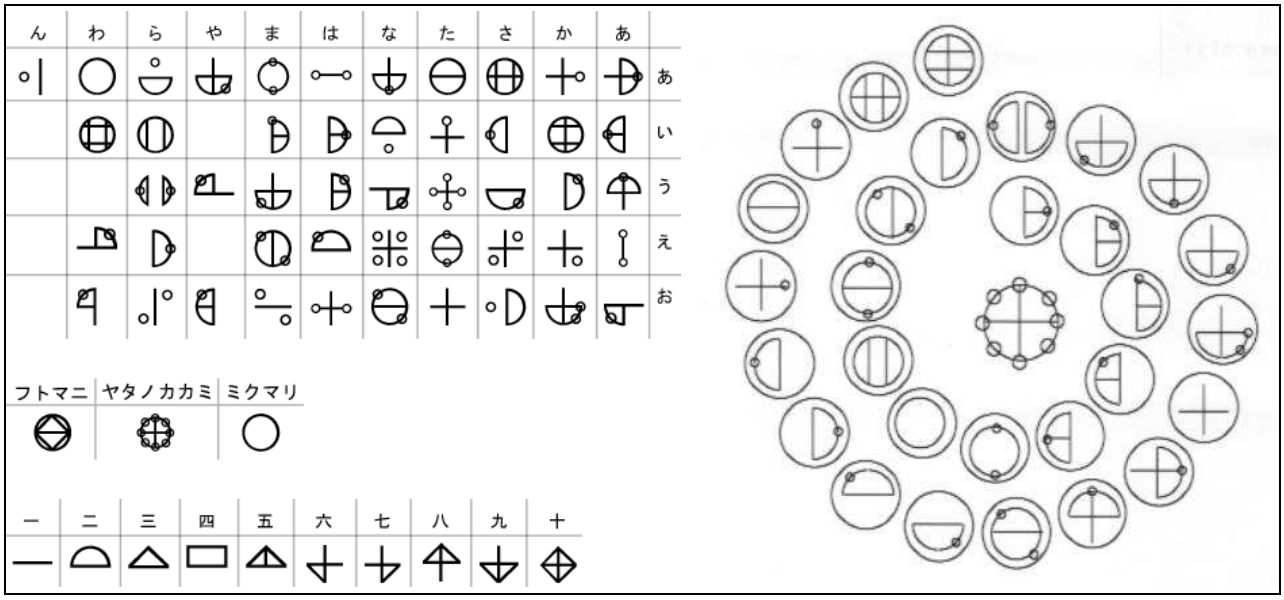
3.1.1　カタカムナ文明

「カタカムナ文献」とは物理学者、楢崎皐月氏（1899～1974）がカタカムナ文献の原本を筆写し解読を行った。楢崎皐月氏の死後も相似象学会により研究、解読が進められた。

カタカムナ文字の原本は、1949 年、兵庫県六甲山系の金鳥山において、平十字氏から「カタカムナ神社の御神体」として楢崎氏に伝えられた巻物である。楢崎氏は巻物を転写して解読を行った。平十字氏は「カタカムナの神を伝える家は、平家と食家(中家を入れて三家)の二つしかない」と語った。

楢崎皐月氏は巻物に描かれていた図形を見て、昭和 19 年(1944)頃、満州吉林での盧有三(90 歳位)老子教老師の話を思い出した。「日本の上古代に、アシア族という種族が存在し、八鏡の文字を使い特殊な鉄を作り、

さまざまな生活技法を開発し高度な文明を持っていた。それが神農氏により伝えられシナの文化のもとになった。秘かに日本に伝わっている」と。記号の形状が、「カタカナ」の「サ」や「キ」や「リ」や「ヰ」などの形状と類似していることや、渦巻状の図象のうちの一つが 48 個の異なる記号により構成されていることから、それらの記号が日本語のイロハ 48 声音に対応していると考えた。



カタカムナ図表（相似象学会誌『相似象』第 3・9号）
カタカムナ声音符と「カタカナ」48 音との関係

解読のポイント

① カタカムナ文字は時計回りで渦巻状に記され中央から読み進める。
② カタカムナ文献は全て簡潔な歌で表されている。
③ 渦巻きの中央には「ヤタノカカミ」「フトマニ」「ミクマリ」と呼ばれる図章が記されている。
④ 二文字あるいは三文字が重なり合って一文字の新しい字形を作る。

4 騎馬民族説 馬具 説

9月9日に田井広栄住職より「馬具を図案化している。先祖が騎馬民族であることを記録に残すための奉納額ではないか」との教示を受けた。馬具の 鐙（あぶみ） と馬銜（はみ）(轡（くつわ）)である。

左写真＝奉納額　　中写真＝木心鉄板張輪 鐙（あぶみ）　　右写真＝ 楕円形鏡板付 轡（くつわ）

{ 5 世紀前半 滋賀新開 1 号墳 福岡 日拝塚古墳『日本馬具大鑑 1 古代上』収録}

4.1 鐙（あぶみ）と馬銜（はみ）(轡（くつわ）)

鐙（あぶみ） は馬に乗る際の足がかりと、鞍の上に 跨（またが） って乗馬中の体の安定を保つ機能を持つ「あしぶみ」からきた名称である。

馬銜（はみ）(轡（くつわ）)とは、馬の口に含ませる金属製の棒状の道具である。馬の口には前に 12 本の切歯があり、切歯の後ろはかなり広い歯のない部分がある。その奥に臼歯（奥歯）が並んでいる。この歯のない部分に馬銜（はみ）をかける。騎手の手綱さばきはこぶしから手綱を通じて馬銜（はみ）に伝えられて、馬を意のままに動かすことができる。

『古墳時代の馬との出会い』収録の「初期馬具の変遷図」と比較した。5 世紀前半～中葉頃の絵である。中央部が 鐙 、下部が 轡 (馬銜)である。

4.2 馬の日本への渡来

3 世紀末(280～290 年)に書かれた魏志倭人伝に「その地には、牛・馬・虎・豹・羊・鵲なし」と記録されている。弥生時代まで日本には馬が居なかった。約 6000 年前、中央ユーラシア草原地帯の人々は、馬を御するための画期的な馬具「馬銜」を発明した。

馬文化が日本に渡来したのは古墳時代、5 世紀初めのことである。馬の遺骸が確認できるのは 5 世紀中頃(西暦 450 年前後)、宮崎県六野原地下式横穴墓群 8 号墓から出土した馬で、轡 を口に装着したままの姿で墓に葬られていた。その頃の馬は体高 120～130cm の小中型馬だった。

岡山県内では百間川沢田遺跡、上東遺跡、川入遺跡などで古墳時代の中型馬に属する馬が出土している。大阪府、和歌山県、奈良県などの畿内、岡山県が古墳時代の中でも、他の地域に先駆けて馬が出土している。

4.3 上部「左・上・左」「左尊位」から見える渡来時期

先祖が騎馬民族であることを記録に残すための奉納額だとすれば、何時、渡来したのかの記録が必要である。上部の「左・上・左」とは「左尊位」を意味している。「左尊位」から渡来時期を推定できる。大修館書店『漢語林』の説明では、「左右いずれかを尊位とするかは、時代や国によって一様ではない。」中国では下記のように区分されている。

突厥国の東西分裂は 583 年である。川上一族の渡来時期は六朝時代の最後、583～589 年頃である。 突厥国の東西分裂による混乱により吉備(黄蕨)国へ渡来した。

左尊位		右尊位	
周	紀元前 1046 年頃～紀元前 256 年	戦国時代	紀元前 403 年～紀元前 221 年
六 朝 時代	222 年～589 年	秦	紀元前 778 年～紀元前 206 年
唐	618 年～690 年・705 年～907 年	漢	紀元前 206 年～263 年
宋	960 年～1279 年	元	1127 年～1368 年
明	1368 年～1644 年		
清	1644 年～1912 年		

5 有木谷の有木の考察

5.1 吉備(黄蕨)中山 有木神社

吉備中山は備前と備中にまたがり、両国の境に有木山が有り有木神社がある。治歴 4 年(1068)には有木神社の名は既に都に聞こえていた。明治初期の『一品吉備津宮社記』に「有木神社。有木山麓鎮座。祭神巨智麿。一説曰、針間牛鹿直」とある。

『古事記』孝霊天皇段に「若日子健吉備津日子命(大吉備津彦命)の兄「日子寤間命」が針間牛鹿臣の祖」とある。

備後 吉備津神社の社家は有鬼氏である。大同元年(806)に備中吉備津宮を分社した時に、吉備中山の有鬼氏より社家が来て元禄頃まで有鬼氏が宮司職であった。古代には祭祀権を持つ人間が政治権力を握っていた。中山神社(津山市一宮)『中山神社資料』の荷前(のさき)祭主は有木氏と東内氏である。荷前とは祭りの時

に、神への供物を集める役である。

有鬼氏から有木氏への変更は、「和銅六年(713)の制」によるものである。「機内と七道との諸国の郡、郷の名は好き字を着けしむ」によるものである。

5.2 魏志倭人伝の「有鬼國」と有木（鬼）神社

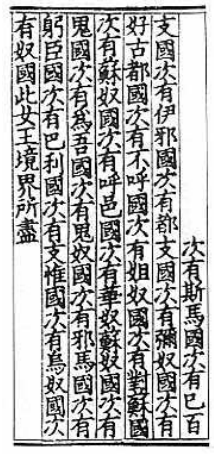
『備前吉備津彦神社縁起』延宝丁巳(延宝五年・1677)の朱印有りに、

「モウ鬼・ツテウ鬼・シャクシャウ鬼トテ不知其数」とある。

『魏志倭人伝』に有鬼國と鬼奴國が記録されている。『先代旧事本紀大成経七十二巻本』に「黄蕨前国一宮」との記録がある。「黄蕨前国一宮」とは、「有鬼國」の「有鬼神社」である。

『魏志倭人伝』は中国の史書『三国志』の「魏書東夷伝」倭人の条の俗称で、撰者は晋の陳寿である。3 世紀後半に成立。倭国の記録は 2～3 世紀である。

鬼奴国の記録は、熊野本宮大社・九鬼宮司家の『九鬼文書』に注目している。九鬼家は大中臣神道の宗家で熊野別当宗家である。古代末、中世から近世にわたり日本最強の九鬼水軍を率いた名門（戦前は子爵）である。


次有斯馬國次有巳百
支國次有伊邪國次有都支國次有彌奴國次有
好古都國次有不呼國次有姐奴國次有對蘇國
次有蘇奴國次有呼邑國次有華奴蘇奴國次有
鬼國次有爲吾國次有鬼奴國次有邪馬國次有
躬臣國次有巴利國次有支惟國次有烏奴國次
有奴國此女王境界所盡

『魏志倭人伝』

自女王國以北、其戸數道里可得略載、其餘旁國遠絶、不可得詳。

次有斯馬國、次有巳百支國、次有伊邪國、次有都支國、次有彌奴國、次有好古都國、次有不呼國、次有姐奴國、次有對蘇國、次有蘇奴國、次有呼邑國、次有華奴蘇奴國、次有鬼國、次有爲吾國、次有鬼奴國、次有邪馬國、次有躬臣國、次有巴利國、次有支惟國、次有烏奴國、

次有奴國、此女王境界所盡。

『先代旧事本紀大成経七十二巻本』「巻第三　陰陽本紀」

「是斎元二神不レ同二異国諸神無一レ威、其法元也、先産二十有三柱神等一、先生二天水建大秋津彦神一（*速秋津日子*）、次生二地水建小秋津媛神一（*速秋津比売*）、此神坐二黄蕨前国一宮一矣、潤二世界一神、有二威徳一神、此二神者水方神也

5.3 有木谷　小田郡矢掛町小田

小田郡矢掛町小田有木谷は、川上一族 15 軒の谷あいにある小さな集落である。集落の東側に観音山(岩屋山)がある。山頂に八畳岩があり竜王を祀っている。南の安部山に安部清明伝承がある。矢掛町には鵜飼との地名があり鵜江神社がある。

5.3.1 大本鵜江神社と「鵜」

大本鵜江神社(岡山県小田郡矢掛町東川面)の祭神は吉備津彦命・宇良御玉命である。社伝に「吉備津彦命昇天、御遺骸を中山の南峰に埋葬する時に、御棺鳴動して一羽の鵜飛び出て、南方に翔る。其止まる処を鵜江神社とす」とある。

鵜江(うごう)神社が 2 箇所(小田郡矢掛町西川面字宮本と小田郡矢掛町小林)ある。『大日本史』に、「吉備津彦がこの国の賊を討つとき、賊が水に没して逃げるのを、楽楽森彦が泳いでこれを逐った形状が鵜のようであり遂に賊を捕らえた」とある。

鵜江神社(笠岡市神島外浦)は『延喜式』式内社である。鵜成神社(祭神　吉備津彦命　小田郡矢掛町宇内)もある。

5.3.2 鵜飼

鵜飼い・鵜飼・鵜養は、鵜を使ってアユなどを獲る漁法の一つである。歴史は古く『日本書紀』神武天皇条に「梁を作つて魚を取る者有り、天皇これを問ふ。対へて曰く、臣はこれ苞苴擔の子と、此れ即ち阿太の養鵜部の始祖なり」とある。鵜養部の記録である。

6 川上一族

古代吉備(黄蕨)国の川上一族の先祖について 2 説が考えられる。

6.1 熊襲の首長　川上梟帥

第 12 代景行天皇の皇子は幼名を小碓 命 といった。後の日本武尊である。武勇に秀てていた小碓 命 は、16 才の時、景行天皇の命により九州に入った小碓 命 は、熊襲の首長川上梟帥が祝事のため一族を集めて酒宴を催した日に、美少女の姿に変装して忍び込み、夜更けて熟睡する川上梟帥に近寄って短刀を突き立て誅伐する。

川上梟帥は死に臨んで小碓 命 の武勇を讃えて日本武尊の号を献じた。こうして小碓 命 は九州の熊襲を平定した。『東日流外三郡誌』は、首長の首長川上梟帥らを日本武尊によって討たれた熊襲が、比較的短期日の間に勢力を回復したことには、荒吐族の援助があったと記録している。

6.2 川上摩須良王と吉備津彦命

『久美浜町誌』(京丹後市久美浜町)に、川上摩須良王系図が収録されている。吉備津彦命との関係で注目したい。王者の谷(現在の久美浜町須田)に住んだ川上摩須良王。川上摩須良女は、丹波の平定を命じられた大和王朝の王族丹波道主命と結婚し、その子比婆須比売は垂仁天皇の皇后となり景行天皇を生んだ。

昭和 56 年(1981)10 月、川上地区須田・伯耆谷古墳群の湯舟坂2号墳から、「金銅装双竜環頭太刀」(2例目)が出土し「国の重要文化財」に指定されている。

提供された写真はカラーでとても立派な工芸品です。（仮称“きび”考編者）

7 まとめ

① 川上神社の絵文字は、魏志倭人伝「有鬼國」の絵文字である。

② 川上一族の先祖は騎馬民族であり、渡来時期は六朝時代の最後 583～589 年頃である。

③ 川上一族の先祖は熊襲・川上梟帥の末裔である。

8 謝辞

最後に、川上神社、有木谷の重要性をご指導いただいたに野崎 豊先生(神道考古学・神社考古学)、「馬具を図案化している。先祖が騎馬民族であることを記録に残すための奉納額ではないのか」との教示を戴いた田井広栄住職に深く感謝したい。

9 追記 吉備文字・忌部文字

① 『東日流外三郡誌』に、「ツボケの民が作ったという奇怪なオテナ石塔」を紹介している。聖なる三山の西に「石塔山」と呼ばれる小高い山があり、大山祇神を祀った神社がある。その神域の 1km 四方に渡って奇怪な石塔がいくつか点在している。川上神社の裏山にも類似した石塔が存在している。(野崎 豊先生の教示)

② 神代文字として、原田実氏は吉備真備(693～775)が使ったとされる吉備文字を紹介している。南北朝時代の藤原長親は『倭仮字反切義解』で吉備真備をカタカナと五十音図の発明者としている。関連して忌部文字 3 種類を紹介している。

10 参考文献

①『神代文字の謎』藤芳義男 1976 桃源社
②『倭人伝原本漢文』http://www.marino.ne.jp/~rendaico/yamataikoku/kanbun1.htm
③『吉備の中山と古代吉備』薬師寺慎一 2001 吉備人出版
④『見てきたように解った 気になる有木史』有木俊統 2008 年
⑤『魏志倭人伝 解読』生野眞好 2007 愛育社
⑥『矢掛町史 本編』昭和 57 年 矢掛町
⑦『矢掛町史 資料編』昭和 57 年 矢掛町
⑧『矢掛町史 民俗遍』昭和 55 年 矢掛町
⑨『地球文字探検隊』浅葉克巳 2004 二玄社
⑩『古代日本の文字世界』平川南編 2000 大修館書店
⑪『文字の世界史』ルイジャン・カルヴェ 1998 河出書房新社
⑫『文字の考古学Ⅰ』菊地徹夫編 2003 同成社
⑬『古代文字』日向数夫編 1972 グラフイック社
⑭『原始日本語はこうして出来た』大室照明 2002 文芸社
⑮『よみがえる日本語』池田満監修 平成 21 年 明治書院
⑯『図説 神代文字入門』原田実 2007 星雲社
⑰『騎馬民族がもたらした日本の言葉』東巌夫 2009 露満堂
⑱『吉備津彦神社史料』文書篇 昭和 11 年吉備津彦神社社務所
⑲『魏志倭人伝 解読』生野眞好 2007 愛育社
⑳『気ままな久美浜写真日記』http://blogs.yahoo.co.jp/gonngennsann629
21『カタカムナは謎の古文書』http://www.jp-spiritual.com/kata_outline1.htm
22『カタカムナ』http://www.h3.dion.ne.jp/~k-kagaku/index.htm
23『カタカムナ研究』http://www3.ocn.ne.jp/~x484kok8/ktkm1.html
24『謎のカタカムナ文明』阿基米得 1981 徳間書店
25『相似象』(第 3・5・6・9・10 号)宇野多美恵 相似象学会誌
26『超科学書「カタカムナ」の謎』深野一幸 1993 廣済堂出版、
27『竹内文書が明かす 超古代日本の秘密』竹田日恵 平成 10 年 日本文芸社
28『定本竹内文献』武田崇元 昭和 59 年 八幡書店
29『超図解 竹内文書Ⅱ』高坂和導 1995 徳間書店
30『東日流外三郡誌の秘密』佐治義彦 1992 KK ベストセラーズ
31『九鬼文書の研究』三浦一郎 昭和 61 年 八幡書店
32『古墳時代を駆けた馬』http://inoues.net/study/kofunuma.html
33『馬具の種類(はみ)』http://www.nagoyakeiba.com/qa90-3.html
34『馬のシルクロード』2007 馬の博物館
35『古墳時代の馬との出会い』2003 橿柳原考古学研究所付属博物館
36『日本馬具大鑑 1 古代上』平成 2 年 日本中央競馬会
37『古事記 日本書紀を知る事典』武光誠 平成 11 年 東京堂出版
38『古事記と日本書紀』2006 西東社
39『日本古典文学大系 67 日本書紀上』昭和 42 年 岩波書店
40「弥生時代の外洋船」『騎馬民族のきた道』留目和美 1996 刀水書房

編 集 後 記

○平成 23 年新春号をお届けします。若狭会長の新年挨拶に岡山県華僑・華人総会会長の劉勝徳様にお言葉をいただきました。劉先生は岡山在住の中国の人々を代表して、日中友好の絆を深めるべき岡山で先頭に立って活躍なさっています。益々のご活躍を期待しています。

○香川県（讃岐国）一宮田村神社の池田博文宮司より、古代には岡山・香川が身近であったことを教えて頂きました。是非今後とも交流を深めたいものと願っています。

○吉備津彦神社の社家末裔の 79 代当主である大守隆様（当会の会員）はＡＰＥＣの経済委員会議長として今回の大きな国際会議では、マスコミ報道の陰で活躍のことに敬服し益々の活躍をお祈りし再会を楽しみにしています。

○今回から樋口氏の「歩き遍路の旅」シリーズが連載されます。氏は歩き遍路で 4 順目を実行中です。戴いた原稿は徳島分だけでも相当の量になります。今回は初回なので「巡礼のマナー」などが入りましたので、お寺の数は少なかったのですが、初心者には参考になったと思います。これからの連載を楽しみにして下さい。

○吉備槌太郎（本松一郎）氏は自身のご先祖を紐解きながら、身近な興味深い郷土史を紹介戴きました。研究成果のネタを随分お持ちですから次号も引き続き登場の予定です。

○井上秀男氏は父譲りの考古・歴史・民族系の資料を各地の博物館などの資料と照合され緻密な研究成果を紹介戴きました。何しろ古文書が相手ですから、筆者は丁寧な対応をなさっていますが、編集のレベルで、文字の読み方・活字変換などの誤字・脱字・誤読もあるやも知れません。皆様よりご指摘ご指導を戴くと嬉しく存知ます。

○延原氏も丸谷氏も毎号寄稿戴いています。延原氏からはユニークな視点で身近な神社にそれとなくただずむ「立石」を特有の検証をして頂きますと、「さもあらん」と信じたくなります。丸谷氏の小さな社に掲げられた奉納額に騎馬民族の末裔の残照を発見されたことも感銘いたしました。

○不肖わたくし山崎も弥生終末期、吉備国の文化の高揚は日本列島の中で一番進化していて、ヤマト政権の「生みの親」的役割を果たしたことを述べてみました。次号は吉備の巨大古墳が何故に記紀などに残っていないのかその謎に挑みます。

○若狭哲六会長は、新刊書の草稿に取り組んで日夜奮戦中の様子です。その成果を多くの仲間が待っています。楽しみなことです。先生頑張って！！！！！

○仮称“きび”考の原稿は主に会員の皆様に投稿・寄稿をお願いしていますが、“きび”考を読んで戴いた方や、お知り合いの方でこの会の主旨に合う方の多彩な投稿をお薦め戴ければと思います。また内容も会員の皆様の「近況報告」「エッセイ」でも勿論「研究成果」など、どしどし投稿をお待ちいたしています。

○新年度は、新しい企画・活動を検討中です。総会を兼ねた集まりもあります。再会を楽しみにしています。今回から文字の大きさを 9 ポイントから 10.5 ポイントに致しましたが、如何でしたか。編者

仮称“きび”考 新春号 2011(平成 23)年 1 月 1 日発行

発　　行　　日本先史古代研究会
会長 若狭哲六　　岡山県備前市東片上 771
事務局　　岡山県岡山市中区桑野 504-1　山崎泰二方
電話＝086-276-6654 FAX=086-276-2241
ﾒｰﾙ＝top@bosaisystem.co.jp
編集委員　　井上秀男 延原勝志 樋口俊介 本松一郎 山崎泰二